地域の“気になる”を個人で背負いこまない「年末ほこりバスターズ！事業」

八尾市社協

自分たちの地域に気になる人を見つけたとき、一人で背負いこまずに地域で話し合う場をつくり、地域全体で支援し、専門機関にもすぐにつなげられるしくみを創ろうと、八尾市の久宝寺地区福祉委員会は市内で初めて「年末ほこりバスターズ！事業」に取り組みました。

メンバーは、地区福祉委員会を中心に市社協コミュニティワーカーやボランティアセンター職員、福祉生活相談支援員、地域包括（ケアマネジャー）、市保健師、民生委員・児童委員、学生ボランティアなどです。

生い茂った竹の葉っぱを刈り取り、部屋が明るくなったと喜んでいただきました

打ち合わせ重ねて地域の連携深まる

1回目の打ち合わせでは、久宝寺小学校区のわがまち推進計画で掲げた基本目標「住民相互が助け合い支え合うまちづくり」の実現のため、「孤独死」や「孤立」を校区の問題ととらえて取り組む必要性を共有しました。

2回の打ち合わせを経て、地区福祉委員会や関係機関から気になる人を報告し、対象者を決定。実施日を12月19日と決めて、事前に対象者への主旨説明を兼ねた訪問調査も行いました。

「これらの打ち合わせや、訪問調査を行う中で、地区福祉委員会と専門職との連携や専門職同士の連携が深まったことが大きな成果」と、八尾市社協の海道志保さんと山形知子さん。今後につながるネットワークができた手応えを感じています。

掃除をきっかけにもっとつながりたい！

当日は、16人のメンバーがグループに分かれて4軒のお宅で、庭や部屋の掃除、蛍光灯の取り換えなど新年を迎えるための掃除のお手伝いをしました。掃除に必要な道具は、社協が「歳末たすけあい募金」を活用して準備しました。

掃除の後、メンバーで振り返りを行い、他のお宅のようすも共有しました。

『危ないからあきらめていた高所作業をしてもらえた』と喜んでいただけた。『昼間は誰ともしゃべらずに過ごすこともある』とおっしゃっていたので、外に出て行けるように声をかけたい」「作業の合間の会話が盛り上がって打ち解け、当初の予定以外のこともしてほしいと頼ってもらえた。地区福祉委員が『今度、家の前を通ったら声かけるわね』とお誘いしたら涙を流して喜んでくれた」などの報告がありました。

久宝寺地区福祉委員会・伊賀滋委員長は総括として「掃除を通して対象者とコミュニケーションを図り関係を深めよう」というねらいが達成できたことを確認。この事業をきっかけにできたつながりをさらに深め、安心して頼める、支え合いのできる地域にしていこうと決意を新たにしています。

府V連

自分たちにできるボランティアを！『災害』をテーマに研修会

大阪府市町村ボランティア連絡会（以下、府V連）は、「災害時にV連絡会は何ができて、どう動いたのか～大阪北部地震の活動から～」をテーマに研修会を開催しました。講師に大阪大学大学院人間科学研究科の渥美公秀教授を招き、高槻市V連絡協議会横井勝さん、吹田市V連絡会中谷惠子さんから実践報告がありました。府内のVや社協職員など参加者は100人を超え、グループワークも行いました。

渥美公秀教授

災害時には声なき声に寄りそってほしい。日頃困っている人を支えているのはVのみなさん。普段のつながりを大切に災害時にも活動してもらいたい。

横井勝さん

これまで社協が行う災害VCの設置・運営シミュレーションにV役として参加していたが、今回の地震では運営側で関わった。想定していた役割とは違ったが、V連と社協が協力して活動できた。

中谷惠子さん

Vの方々が安心して気もちよく活動できるよう声かけをていねいに行った。待ち時間などちょっとした時間にVさんと輪になって話すことで一体感もあった。

参加者から「他市の災害VCの運営状況やVとの関わり方を詳しく知ることができた、災害V＝力仕事のイメージだったが、実際にはこんなに裏方でサポートができるのかと驚いた。自分のできることをしていきたい」といった声が寄せられました。

●府V連では、連絡会同士のつながりを深め、地域に根ざした活動を推進していきます。

第12回全国校区・小地域福祉活動サミット in 豊中

「みんなで語ろう!! 住民主体の地域福祉活動の醍醐味」～ひとりぼっちをつくらない～

全国校区・小地域福祉活動サミットは、小・中学校区などの小地域でさまざまな地域福祉活動に取り組む全国の実践者が集う交流会です。

12回目を迎える今年度は、第1回開催地の豊中市で、住民主体の原点に立ち返り、住民交流型として1月12日に開催されました。

全国から訪れた参加者をボランちゃん（左）とマチカネくん（右）がお出迎え!

基調シンポジウム

はじめに、厚生労働省前社会・援護局生活困窮者自立支援室長の本後健氏、NHKエグゼクティブプロデューサーの棚谷克巳氏より、我が事・丸ごとの地域づくりに向けた取り組みや、大阪北部地震・台風21号に対する豊中の住民組織が行った対応などについて情報提供。

次に、「一人も取りこぼさない」「排除から包摂へ」「支えられていた人が支え手に」「すべての人に居場所と役割を」のテーマに沿った、小地域活動実践者による報告がありました。

◆80代の親と50代の娘が自宅で亡くなっていた事案を受け始まった「ローラー作戦」では、ひとり暮らし高齢者に限らず制度の狭間で課題を抱える人を把握するため、全戸を見守り訪問しています。

◆大阪北部地震では、発災からわずか4時間で約1万2千人の市内要援護者等の安否確認が行われました。校区福祉委員会、民生・児童委員会による平時の見守り活動から構築された地域住民の顔の見える関係性が、災害時の迅速な対応にもつながっています。

会場には市内の38校区福祉委員会の活動紹介パネルが設置されました

◆ゴミ屋敷や引きこもりなど、近隣住民から見た「困った人」は、地域で孤立し悩みを一人で抱えた「困っている人」であり、クレームを入れる近隣住民は、日頃から本人を「気にかけている人」とも言えます。近隣住民を巻き込むことで孤立している人を支える地域の輪が広がり、本人と地域の相互が変わっていく機会になります。

◆シニア男性の社会参加の場として、都市型農園「豊中あぐり塾」を実施。現在市内3ヶ所で行われている当事業は、人と人がつながり、ふれあい、認め合い、支え合う共有空間（コモンズ）として、野菜とともに地域福祉の担い手が育つ拠点となっています。

分科会

10の分科会に分かれ、さまざまな小地域活動の事例発表がありました。ここでは、一部の分科会の内容を紹介します。

集合住宅のコミュニティづくり

自治会と社協や施設、多団体が協働したネットワークや、子育て支援から自治会葬儀などまさに「ゆりかごから墓場まで」住民を支える自治会活動、マンション単位での交流会など、集合住宅の特色に合わせたさまざまな取り組みが紹介されました。

コーディネーターの奈良県立大学・佐藤由美准教授は、集合住宅のコミュニティづくりに重要な要素として、集合住宅の特性（組織・管理体制、拠点）の活用、エリアマネジメントの視点、災害時に力を発揮するコミュニティを平時からつくることの3点を述べました。

施設がコミュニティに果たす役割

近年発生した大規模災害の被災地施設による実践、地域とのつながりや新たな地域貢献のかたちについて報告がありました。

平時から防災訓練や校区福祉委員会などとの交流を重ね、顔なじみの関係構築が求められます。また、施設が地域課題を知り、自分たちにも取り組める活動を協議することが、地域貢献につながります。

コーディネーターの関西学院大学・藤井博志教授は「施設利用者も地域住民。施設が特別な活動をするのではなく、施設と地域が平時からつながりを深めることが、災害時の連携につながる」と述べました。

クロージングでは、各分科会のコーディネーターにより、内容を報告。社協や多団体と連携し、住民が主体となって小地域活動を広げていく必要性を会場の参加者と再確認しました。

クロージングのようす

また、サミットにあわせ結成した高校生を含む地域住民や市職員からなる地域共生劇団『丸ごと劇団』による演劇に、会場は笑いと感動に包まれフィナーレを迎え、次回開催地である埼玉県狭山市へフラッグを引継ぎました。